



講義を受ける
となると、ノ
ー
トを取るなど、
いかにも講義を
聞いているよう
に見える「身体
化」が生徒には
確立されている。これに対して、
AL(アクティブラーニング)で
は集中度が低い。
そのため、教師
には「講義の方
がよい」という
本音がある。こ
のような「従来
の教授学習の枠
組み」を、その外
にある「仕事・
社会へのトラン
ジション(移行)
」につなぎ直すよ
う筆者は提唱す
る。「主体的・対
話的で深い学び」
というALについても、県や学
校によって相当な温度差があり、
格差が生まれている。2030
年、2050年社会を乗り越え
る準備である改革に対応できな
い学校に対して、筆者は警鐘を
鳴らす。「関係者の無知により」
県や地域、学校が衰退していく
のは勝手だが、そこに居住し、

アクティブラーニング型授業
の基本形と生徒の身体性
学びと成長の講話シリーズ1



溝上慎一 著
1080円 東信堂
☎03-3818-5521

大人になっていく子ども・若者の
未来が危ぶまれるのには心が
痛む。そして、進学実績や就
職率に一喜一憂するのではなく、
ALに適した目標設定とアセス
メントが必要だと言う。
AL改革の喫緊の課題は、
「二方通行的な知識伝達型とし
ての講義型を講義+AL型授業
に転換すること
であり、そのこ
とによって、主
体的学習は、面
白さなどの即自
的な「課題依存
型」から「自己
調整型」、そし
て自身を認知す
る対自的な「人
生型」へと深ま
ると筆者は言う。
評者は考える。
ときの教育政策
に振り回されて、
卒業までの教育に追い回される。
これでは教育は創造の楽しさを
失ってしまう。学校からのトラ
ンジション後の生涯の充実を目
指すとともに、二、三十年後の
社会に向けた価値をともに創り
出す、そここそ改革とALの
神髄と楽しさがあると言えよう。
(前聖徳大学教授・西村美東士)